

書評

No. 52
1980. 6



書評編集委員会

1980年6月号 通巻52号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎ 388-1121 内線 776)
頒 価 250円



入学式が終り、クラブ・サークルの喧嘩そのものの歓誘合戦が終る頃、俗に言われる五月のゴールデンウィークとなる。この連休明けの五月の第二週目あたりになるとそろそろ新入生の五月病とやらが出てくる。今更、五月病といったところで誰も大して驚きはしないかもしれない。しかし、この五月病についてはもっと違った見方をすべきではないだろうか？ 全くの概論でしかない一般教養に、もし本当に失望しなかつたら、あるいは苦しい受験地獄をかいくくって到達した大学が、これほどつまらないものであつた、という大学の幻想が打ち砕かれないような新入生こそ、ごく当り前の人間としての感覚がマヒしているとはいえないだろうか？ 少くとも今の大学教育はカリキュラムを見るだけでも、失望せざるを得ないのが現実であるからだ。

これまで一般的に五月病とは、急激な学生生活の変化に対応できずに、何とか逃げ出そうとする受身の体制の一つの精神的現象などと分析されて来た。その他にも多くの要因はあるだろうことは十分予測される。しかし、あの大学闘争が激しく全国的に吹き荒れた、68年~71年の四年間程はこの五月病はほとんど目立って現われなかつた、という大きな意味があるのではないだろうか？ 又、この時期関大のみならず全国の大学において

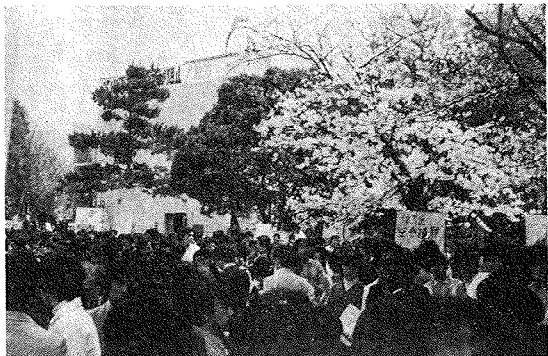
1 羅針盤

4 ——追悼サルトル——
サルトルと現代

書評

- | | | |
|----|-----------------------------|-------|
| 14 | 渡辺幸博著「サルトルの哲学」
——人間と歴史—— | 川神 伝弘 |
| 48 | 野間 宏著「崩解感覚」 | 小田 実篤 |
| 51 | 辻 邦生著「廻廊にて」 | 小田 実篤 |

- | | | |
|----|---------------------------------|-------|
| 21 | 研究余滴 ボードレール 1
ボードレールとバリ(その1) | 山村 嘉己 |
| 33 | 日本中国 ことばの来往 その1 | 芝田 稔 |
| 37 | 差別落書問題をめぐって (1) | 田宮 武 |
| 53 | お知らせ | |
| 54 | 編集後記 | |



自殺する人間が皆無に近いほど減少したことも同時に重要なことだと思われる。

では一体、何故大学闘争の時期には五月病も現われず又、自殺者も極端に減少したのだろうか？ おそらく、大学闘争の渦中においては、各自がある緊張関係の中にとりこまれざるを得ないし、それぞれが何らかの選択を常に迫られるという、情況による規定により自己の存在と立場についての問題意識を持たざるを得なかった結果ではないだろうか？

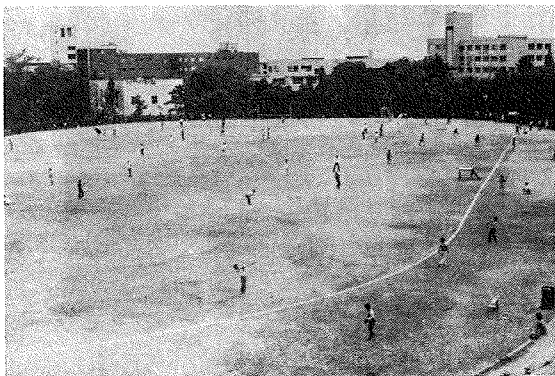
関大通信第一〇一号の昭和五四年度学生生活の実態調査報告によれば、クラブ・同好会への所属が四八・四％いる。その内、スポーツ関係が十六・四％、文化・学術関係が合せて二四％、レジャー・趣味が六・〇％であるこの数字はそれほどの意味がある訳ではないが、問題はクラブ・同好会に入った動機と、そこで得たものだ。

入った動機の第一位は「大学内に自分の場が欲しかった」であり、二位は「スポーツを楽しまため」そして、三位が「趣味と一致したから」、四位が「友人が欲しかった」である。この数字は何を意味しているのだろうか？ いや結論を出すのは止めよう。それよりも、クラブ・同好会で得たものは何かを見てみよう。第一位は「友人・交際・連帯感」で四八・九％、二位が「他人との協調・

忍耐・責任感・自治意識の涵養」が十六・一％である。つまり、結論的な見方をする、大部分の学生は淋しい自己の慰めとして、あるいはその場所としてクラブ・同好会へ入るのであり、その限りでは満足している、という結果になっている。しかし、本当にそうであろうか。

クラブ・同好会で自からの部屋を持っているところかどうかだけあるのか？自からの活動を表現する機会を持っているのか？自からの活動資金は保障されているのか？ 研究室もなければ、研究発表の機会もなく、まして活動費もない、という同好会・クラブ活動で一体何がなしえられるのかはいささか疑問といわざるを得ない。

もちろん、物理的な条件や資金が確保されれば、これらの活動は立派なものだ、というつもりはない。全く逆である。自からの活動の場所を自から保障しようという活動とは、果して活動といえるのか？ ということである。関大の文化情況は、明らかに女性差別と見なされる「ポルノ」映画の上映を特別講堂で平気で許し、尚且それがいつも満員御礼ということに象徴的に現われていなくとも、それ以上ではないだろうか？ 別に関大当局にポルノの上映を許すな、という気はない。そうではなく何故敢えて関大構内でポルノが上映されているのかということである。これは関大の文化情況の反映ではないのか？



サルトルと現代

渡 辺 幸 博



1

サルトルが亡くなった。一つの時代が去ったという思いを禁ずることができない。だが、どんな時代が去ったのか。

たしかに、サルトルは自分をすでに古典的知識人といわれるべきであることを自覚していた。彼は自らがすでに、時代の最先端にあるのではないことを知っていたのである。にもかかわらず、サルトルは死にいたるまで、あるべき未来を追求し、人間の運命に思いを馳せること

をやめなかった。

周知のとおり、サルトルは第二次大戦後、実存主義の旗手として、はなばなしく登場して以来、つねに時代の最先端にあった。いや、たんに最先端にあったというのは適当ではない。われわれは、それが誠実に歴史的現実にかかわるといふ彼の基本的姿勢のしからしめたものであったことをはっきりと認識しなければならぬ。それはサルトルが自らの思想に、いかに忠実であろうとしたかを示すものであるからである。いまの世のなかで、言行を一致させることがいかに困難であるかは、私づときがあらためていうまでもあるまい。まして、その思想、

発言が根源的であればあるほど、それを実践に移すことはきわめて困難である。その意味でも、サルトルは間違いない希有な人物であった。

私がサルトルの思想に接してから三十年近くなる。いま彼の思想の展開のあとを顧みるとき、私はそこに見事に首尾二貫した思想の歩みを見ることができるよう思う。にもかかわらず、サルトルほど、いろいろと誤解されてきた思想家も少なからう。その原因の一つは、前述のように、彼が時代の最先端を行っていたころにあったと思われる。哲学、文学、評論という多方面にわたる彼の文筆活動は、それがつねに歴史的現実や精神的状況の問題に密接にかかわっていたかぎらず、ややもすれば曲解され、多くの誤解を生まざるをえなかったやうである。しかし、これらの誤解も、サルトルの思想の根底にあるものを見ると、ただちに氷解する類のものであったといえよう。もちろん、私はサルトルの理論や実践に、一度も誤りがなかったというつもりはない。あるいは、サルトル自身、一度も自らの言動を訂正したことがないというのでもない。私がいいたいのは試行錯誤はもちろんあったとしても、彼のよってたつ基本的立場はつねに一貫していたということである。われわれはそれが八人間に真に自由な在り方を可能にする状況をめざすVとところにあっ

た、ということが出来る。

しかも、その基本的立場は、かなり早くから培われていたと思われるのである。たとえば、われわれは『存在と無』(一九四三)においても、サルトルの思想が、すでに状況の哲学へと展開されるべき必然性を認むとすることが出来るであろう。たしかに、そこには、まだまだ払拭しきれない、かなりの観念性が残っていたとしても、終生八人間とは何かVと問いつづけたサルトルの思想の根幹は、この時点で確立されたとは私は思っている。

ところで、われわれは一方では、サルトルの思想の展開を、ヨーロッパの伝統的思想の中核をなすプラトニズムから脱却して行く歩みとしても見る事が出来る。たとえば、祖父シュバイツァーに植えつけられたプラトニズムの超克は、サルトルにとつて、けっして容易ではなかったと思われるのであるが、しかし、このプラトニズムの超克なくてはサルトルの作家活動はありえなかったであろうことを考えると、伝統的思想との対決が、サルトルの終生の課題であったことは明らかであるからである。そのことは八吐き氣Vが開示する存在の姿が、プラトニズムのそれとまったく相反する偶然な存在であったことに象徴されている。したがって、サルトルが求めてやまなかった人間的自由が、近代ヨーロッパのブルジョ



ワ・ヒューマンイズムのそれと、似て非なるものであったことはいうまでもない。

ここで、われわれはサルトルの歩んできた道を、あとづけるいとまはない。ただ、この小文でもって、サルトルの生きた時代がいかなる時代であったのか。そして、それがこんにちのわれわれにとって、いかなる意味をもっているのか、ということについて、若干考えてみたい。

2

サルトルの思想を少しでも追ったことのあるものは、サルトルにあって全体概念がきわめて重要な位置をしめていることに、簡単に気づくはずである。それはサルトルがあるべき状況を全体的にとらえなければならぬと考へていたことを意味している。いかなれば、人間的自由を可能にする社会の将来は、分析的理性を超えた全体的立場に立たないかぎり把握しえないということである。そして、この全体概念における一つのモメントになっているのが、歴史と人間であった。つまり、サルトルにとって、あるべき未来への展望は、歴史と人間との正しい把握なくてはありえないということになる。『弁証法的理性批判』(一九六〇)はまさに、そのための具体的

作業にはかならない。もちろん、中村雄二郎氏のように、それが「学問的になうまういかなかった」(一九八〇年四月十六日朝日新聞夕刊)とか、あるいは海老坂武氏のように「歴史や集団をとらえなおそうとする彼の仕事は、歴史の行きつく先をとらえそねて失敗した」(同上)と評することも可能であろう。そして、あるべき歴史的状况の具体的素描を、サルトルがついに果たしえなかったのも事実である。しかし、そのことから、サルトルのこのみた現実の歴史の構造、あるいは具体的歴史のなかにある人間の実践的構造の把握が、意味がないと結論づけることは許されない。それのみか、私はマルクス主義的歴史把握に、人間の実存的在り方をくみこもうという彼のころころみは、見事に成功しているといっただけではないかと思っている。

たとえば、希少性を欲望との関連から歴史の物質的基本構造と見るサルトルの立場は、生産力と生産関係とのあいだに生ずる矛盾に歴史の弁証法的発展のモメントを見るマルクスの理論に、より根源的歴史的事実を付け加えたことにならぬであろうか。あるいは、歴史の実証主義的研究とともに、マルクス主義における基本的概念となる物質が、人間的意味を負わされないかぎり、それ自体では何のもでもありえないというサルトルの指摘は、

人間関係がけっして一つの生産物、あるいは物質に還元されうるものではないということを示すことによって、歴史を創造する人間の主体の在り方の具体的考察を可能にするものであったといえよう。

もちろん、サルトルにあって、歴史における人間関係とは、歴史が人間をつくるかぎりにおいて、まさに人間が歴史をつくるという基本的考え方にもとづいて、はじめて具体的でありうる。つまり、人間関係が状況におけるものであり、与えられた社会的条件においてのみ可能であることは事実であるとしても、ここにいわれている歴史的社会的状況それ自体が、また人間的であることをサルトルは明確にするのである。

そのことは、エンゲルスの自然弁証法を批判するサルトルの理論にはっきりと見てとれる。サルトルにとって、意識を物質に還元することは、まさに自由なる意識を否定するものでしかなかったからである。サルトルのいう弁証法は行動の生じた理論として、人間と自然、および人間相互の関係において求められなければならないが、それは人間こそが弁証法の不可欠なモメントである否定作用を行ないうる唯一のものであるというサルトルの立場からすれば、当然のことであった。

それだけではない。歴史が個人々の意思とは違ったよ

うに作られるという事実から、歴史を動かすかくれた法則を見いだすべきだというマルクス主義の理論において歴史が個人々の手をはかれるのは、われわれが歴史をつくらないからではなく、他者もひとしく歴史をつくるからであるというエンゲルスの考え方にしたがいないながらもサルトルは歴史において個人々の行為が無にひとしくなるのは、個人々が歴史において疎外されているからだと解する。いうまでもなく、そこには、歴史をつくるのはあくまで人間であるというサルトルの基本的立場があるのであるが、そのことはただちに、サルトルをして歴史の現実における疎外の問題の解明へとおもむかせる。

3

その場合、疎外概念が商品生産における労働者の疎外という初期マルクスのそれに限定されないのはいうまでもない。フランス革命における群衆の動きをモデルにしたサルトルの集団論は、そこから出てきたものであるすなわち、サルトルは孤立し分断された群衆が自らの自由を確立し、疎外された状況を超克するためには、集団を形成せざるをえないことを明らかにしているが、このようにして形成された集団も、自らの崩壊を避け、その



ジャン・ロ(中央)とジャン・ジュネ(その右)とともに酒場「ボン・ロワイヤール」にて

結束を維持するために、結局は成員の自由を奪うことになり、果てはふたたび群衆化して行かざるをえない経緯をたんねんに追求している。十年ほど前、連合赤軍による浅間山の事件があったとき、たまたまこのサルトルの集団論を読んでいた私は、集団(セクト)内のリンチ事件に象徴される集団の形成と解体の構造が、まさにサルトルの描くとおりであったことに驚かされたものである。

そして、友愛と恐怖が同居するこの集団の論理は、おそらくサルトルにとって、あるべき未来の策定を、いちじろしく困難にするものであったことは想像に難くない。

われわれは五月革命以後、サルトルが集団のあるべき形態を、一応は直接民主主義に見ているのを知ることが出来る。それはいかなる党派性もない集団であって、サルトルの集団論における類型からいえば、融合集団から組織集団にあたるのではないかと思われる。しかしその場合、集団は当然、制度集団に見られる堅固さを望むことができないであろうし、さらに融合集団はともかく、誓約集団、組織集団がすでに友愛とともに恐怖の構造を避けがたくもっていることを思えば、サルトルがこのような集団を自ら認めるのに迷っていたのが分るような気がする(なお、サルトルの集団論についての詳細は拙著「サルトルの哲学」世界思想社を参照されたい)。

事実、レヴィとの最後の対談（週刊誌『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』朝日ジャーナル）に、いま希望とは「海老坂武訳第二十二巻、十六号（十八号）」において、サルトルは『弁証法的理性批判』において、うまく切り抜けることができない困難があったことを告白し、そこでは八友愛Vの場がほとんど残されていないといっている。ここで、サルトルは友愛関係が、社会を政治よりもいっそう根本的な人間相互の絆から生ずるとみなすとき可能になると考えているようであるが、私はそれが自然の友愛にもとづいた共存関係を意味しているのではないかと考える。だとすれば、二十世紀のこんにちの政治的状况において、原始共産社会のような共存関係はとうていのぞまれないわけで、サルトルが具体的にどのようになり方を考えていたにしても、残念ながらその実現には、はなはだ疑問を覚えずにはおれないのである。

て描いてはいる。しかし、われわれはその根底にある根本的思想を見逃してはならない。八まなざしVの体験は「A吐き気Vが裸の存在についての体験であったと同じく一つの体験であって、自分とひとしい自由な意識をもった他者の存在を承認する原体験であったと解すべきであるからである。すなわち、八まなざしVは、けっして人間関係に見られる相克の宿命性を描こうとしたのではなく、むしろ、その根底には他者了解という根源的体験があったことが忘れられてはならないであろう。そのことは『存在と無』に先立つ早い時期に、サルトルが他者了解のための八実存的精神分析Vの構想を、すでにもっていたことにもあきらかである。そうでなければ、人間の在り方を自由の相において問いつづけるというサルトルの意図は、最初からくじけていたはずである。その意味でも、友愛の思想少なくともその萌芽は早くからサルトルの心のなかにあったのだと考えたい。ただ、それが積極的な主題とならなかったのは、現実の歴史的状況がそれには、あまりにもきびしすぎたからではなからうか。

4
もっともこの状況はこんにちでも、それほど変わっていない



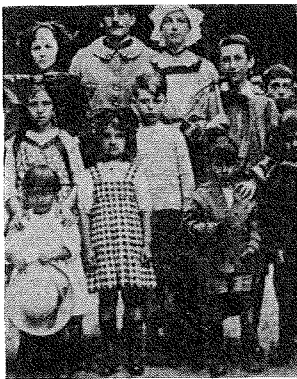
シモーヌ・ド・ヴォワールとともに

るようには思えない。にもかかわらず、なぜサルトルは友愛を説くのであろうか。それは何度も絶望におちいりながらも、なおも人類の未来への希望をすてなかつたサルトルの最後のよりどころであつたのではないかと、思われるのである。私はそこに、戦後の混沌とした状況のなかで、入敗者の頭張りVを説いた精神が生きつづけているのを見る思いがする。しかし、はたしてサルトルは、本当に人間性の開花を可能にするような、抑圧のまったく存在しない世界が実現すると信じていたのだろうか。彼にとつてあるべき未来の具体的社会像はいかなるものであつたのだろうか。いまやわれわれは永久にそれを知るすべはない。ただ、私はサルトルの胸中にも、またその具体的姿は描かれていなかつたのではないかと思つていゝる。あつたのは、どんなことがあつても、あるべき未来を求めつづければならない、という思いであり、あるべき未来は描きうるし、また描かなければならないという頑張りではなかつたろうか。サルトルが在るべきわれわれの在り方を問うのも、すべてそのためではなかつたかと思われるのである。死にいたるまでのサルトルの課題が倫理学であつたのは、その意味でも当然であつたことにならう。

サルトルの生きた時代は、終始、資本主義と社会主義

いまでもなく、サルトルは体制の問題にのみ関心をいだいてきたのではない。彼にとつて、あらゆる抑圧は理由のいかんを問わず排除されねばならなかつたからである。ユダヤ人や黒人をめぐる人種問題、あるいは植民地の問題に対する彼の徹底した告発については、広く知られているとおりでである。

かつて、私は知識人論(知識人・その虚像と実像)・創元社所収)において「批判的知識人こそ、現代もつとも要求されている知識人ではないか」と書いてあることがあるが、そのとき、その典型として私の脳裏にあつたのはサ



ジャン・ポール・サルトルの教師として働いたことのある、1916年、1917年頃の小学校で、制服を着た子供たちと、軍服を着た兵隊の横断歩道を渡る。(1916, 17年頃)

とのイデオロギーの対決の時代であつた。そして、早くから労働者の側に立つて、資本主義体制の欺瞞性と誤謬をあばきつづけたサルトルが、このイデオロギーの闘いに積極的に参加してきたのは周知のとおりである。しかし、それはサルトルにほとんどつねに、きびしい挫折のながい体験を味わせてきた。東西両陣営の対立は、形を変えながらも相変わらず続いている。アメリカを中心とする資本主義体制はその矛盾をかかえたまま、まだなかなか崩れそうにない。一方、社会主義国家に見られる抑圧の事実、あるいは社会主義国家間の確執、サルトルの望むような歴史的状況は、近づくどころか、ますます遠のいていゝるようになつて見える。このような状況であるかぎり、サルトルが人間に真に自由をもたらす社会の将来は、体制の問題を解決するところにあるのではないのではないのか、と考えるにいたつたとしても不思議ではない。もちろん、私はサルトルがそう考えたと断言してゐるわけではない。ただ、人間に対する最後の希望を友愛に託さざるをえなかつたサルトルの心胸を推しはかるとき、このような思いが強くするのである。そして、もしそうであつても、私はサルトルが自らの生きた時代に、幕を下ろしたときには、けつてならないのではないかと思つてゐる。

ルトルであつた。そして、その状況はいまも変わつてゐると思われないのである。サルトルが批判しつづけてきた状況は、根本的には何ひとつ超えられてゐるようには思われなかつたし、加えて、近代的科学技術文明のもたらす矛盾は、いよいよ顕著になつてきている。戦後いち早くサルトルが警告を發した核爆弾にしても、いまなお質量ともに増加の一途をたどつてゐる。環境汚染、エネルギー源をはじめとする資源の問題など、全世界をあげて解決しなければならぬ問題は山積してゐる。その意味でも、真の自由を可能にする社会の将来をめざして、徹底的に批判しつづけてきたサルトルの態度が、いまの時代ほど強く要求されねばならないときはないのではないかと思われるのである。サルトル自身が認めてゐるようたしかに彼は古典的知識人の範疇に入るかも知れない。しかし、それはサルトルのごとき知識人がもはや必要ではないといふことを、けつて意味するものではない。へどんなにきびしい状況であつても、くじけずに希望をもちつづければならない。サルトルはいまも私の耳に、こう語りつづけていゝるようと思えてならない。

(一九八〇年五月十日)

(哲学科教授・仏哲学専攻・わたなべ ゆきひろ)

渡辺幸博著 サルトルの哲学 (世界思想社刊 一三〇〇円)

人間と歴史

川神伝弘

本来ならば、文学畑の人間のしゃしゃり出る幕ではないのであるが、一応サルトルを学生時代から読みつづけて来たというそれだけの資格で、わが身の浅学非才をもちえりみず、敢て先学の労作を粗末なる組上に載せるほど厚顔ではないが故に、ここでは書評というよりはむしろこの本の内容の紹介及び感想といったものを記すにとどめた。

サルトルに関する書物(翻訳も含めて)の教えでは、我が国が当のフランスやアメリカをもはるかに凌いでいると言われる。戦後日本の土壌によほどマツチした何物かをサルトルの思想がもっていたのであろう。パリのサンジ

エルマン・デブレをうろつく黒セーターに長髪姿の「実存主義者」なるものを真似た、自称「実存主義者」のうつろなまなざしを、草深き田舎から出てきたばかりのうぶな少年が、極東の小島の大部会の盛り場にある、小さなジャズ喫茶の繁煙もうもうたる中で、ひそやかなる羨望の目で見返していた頃から既に二十年を経ようとしてゐる。かの如く、実存主義者は日本に於いては思想にとどまらず、一つの風俗としてしばし定着したものであった。しかし、こうした自称「実存主義者」達がどのよう

いらず』の戦後評を、枯木にまざる元枝なし、これが実存主義だ」と開陳したまいて、エロス讚美の文学、セックス解放小説の感を抱かしめるに与かりて功のあったさる高名な大学者先生のあったらしいことも、はるかにも

れうけたまわっている。大学の先生にして尚かくの如きであった時代、あとは推して知るべしであらう。こうした誤解が、混乱が生じる原因は、一つにはサルトルの哲学が非常に難解であるその記述にもよるのである。カントの純粹理性批判を講ん読した人の数知れず、通読した人の影を見ずとよく言われるが、サルトルの『存在と無』、『弁証法的理性批判』などは、前者をはるかに誇張した表現すら許されるほどなのだ。サルトルは分らないが故に余計な疑がられ、



三人の音楽士

人気が出たのであるなどと本気で言う人も少なくない。また、サルトル自身の著作と平行して出て来る解説書もこれまた熱狂的サルトル信奉者ばかりであったから、思考態度、その志向性また文体などもまったくサルトルのエピゴネンの域を出す、これまたひどく悪趣味な体裁の読みづらい悪文のものが多かったように思う。

しかし、戦後日本の知的土壌に一躍大輪の花を咲かせたサルトル・カミュの実存主義ブームのお蔭で、ハイデッガーやヤスパース、更にはかつては見向きもされなくなっていたニーチェやキェルケゴールまでが日の目を見ることが出来たのであり、こうした先達も地下に於いてはサルトルの方へは足を向けて眠ることが出来ないであらう。



刑 礎

さて、こうした混乱を沈静せしめる一書が出てきた。
『サルトルの哲学』（渡辺幸博著）は、一口に言っても徒

この著書の構成は四部からなっている。前書でうたわ
れているように現象学と存在論の関係を扱う第一部、史
的唯物論への傾斜を説明する全体化の理論を第二部、一
二部でサルトルの思想の発生と生長及び変遷を統率で結
んでおいたのち、横の関係をサルトルと現代思想として
第三部でとりわけマルクス主義との関係及び構造主義と
の関係の綿密な分析と、精緻を極めたロジックが展開さ
れる。このように思想のヴェルテイカルな面とオリゾン
タルな面の説明を終えたところで、サルトルの思想と常
に平行して育っていった文学に対する著者の研究と見解
が、第四部では畏怖すべきほどの明解さをもって語られ
ている。

第一部の1では現象学がサルトルの存在論にとって、
どのようにとり入れられたか、フッサールの現象学が基
本的契機として採用されるに至った動機と根拠、またそ
の有効性が論じられる。もっとも、現象学的な物の見方
については、サルトルのドイツ留学によるフッサールの
嚆矢に接する以前からの、混沌たる観念として胸の奥に
しまいこまれていたものであることは、後年フランスの
ジャンソンが伝記に於いて明らかにしたが、明確な体系
を整えた論理的構築物として、既に堅固な思想として成
立していたフッサール現象学は、やはりサルトルのその

来のものに比べまことに分りやすいという点で無類であ
る。これは著者のサルトル理解、思想の把握が充分に深
いものであることを物語る。明晰に把握され、正確に頭
の中で整理された材料でなければ鮮明な文章表現にはな
らないものである。ことほど左様に、著書のとがきに
「本書のかんりの部分は過去に発表された論文にもづ
いて書かれたものである」とあるように、短時間やっ
つけ仕事ではなく、著者の長年月を要した、磨きぬかれ
た「玉」としての労作のみがもつ深い味わいを見るので
ある。

更にもう一つの特徴は、膨大なサルトル哲学・文学の
全貌を一人の著者がカバーした点にある。哲学、文学、
（劇作・小説政治・評論等々）いろいろにクロスオーバー
しているサルトルの活動を夫々の分野別に解説したのが
が殆んどであるだけに、こうした試みはすぐれて稀な業
績なのである。勿論、これまでもサルトルの全体像へ
のアプローチは幾多の書物において行なわれてきたので
あるが、その殆んどは多数の執筆者による共著形式であ
ったし、そうでないものでも、小説、哲学等々どれかの
分野への片寄りが目についた。そうした意味合いからも
この著書のバランスのとれた割付は高く評価されるべき
であろう。

後の思想展開の礎石となったことは否定しがたい。そこ
で、著者は「嘔吐」に端を発した日常性のヴェールの下
に隠された存在が、如何にして自らを暗示し来たったか
を語り、イマジニョ論、美の問題、情緒論、自我論等に
言及しつつこの存在の正体を明らかにし、かつそれと対
蹠的位置を占める理想的人間意識の説明に及ぶ。すなわ
ちサルトルの存在論に於ける重要な二つの基本的契機た
る「即自」対「対自」の関係の出自と機能及びその波及効果の
綿密なチェックが行われる。但し、著者は「ハ吐き気V
は……還元を行なう暇もなく、自らを暗示し……サルトル
の現象学に意図的、自覚的還元など、はじめから必要
でなかったことが了解されるであろう。」としている所
は筆者と異なる見解である。私自身としては小説の主人公
たるロカンタンと作者サルトルとは一応個別の人格と見
做すが故に。更に、サルトルの嘔吐以後のとりわけヌー
ボー・ロマンのジャンルにふんだんに現れる、非反省的
意識描写に強い影響を与えたという点でも、この現象学
的還元の問題はおろそかに出来ない、一つの重要なメモ
メントでもあるが故に。また、サルトルの現象学的存在論
の試みも、科学と心理学、唯物論と現象学、實在論と観
念論の夫々の間にある、どのような経緯を辿って「自
由論」に行き着いたか克明に説明されている。第一部の

2に於いては、プラトンのイデアにさかのぼる伝統的の中
体概念の超克に、現象学がどのように役立つたかの説明
が存在の偶然性を軸にして語られ、因果律の否定や科
的客観主義の誤りから、必然的に決定論の拒否に至るサ
ルトル実存主義の理論的展開の説明である。これらはす
べて不安と自由、自由と状況の問題を鮮明に浮かび上が
らせる伏線の効果を持っており、更には常に状況にアン
ガジェされたいでいられない人間の本来の在り方が、
当然の如くサルトルをして歴史に駆り立て、ついには全
体化の哲学へと導かれてゆく道程が理路整然と述べらる。

第二部の1は、とりわけ「全体化」と「個人的実践」
という齟齬を含んだ観念同士の関係がくわしく述べられ
ひいては「弁証法的理性」とは何かがつまりらかにされ
ている。我々文学畑の人間としては、この辺りのサルトル
のロジックにはまったく手をやくだのであるが、著者は
弁証法的必然性と個人的実践や人間関係と稀少性等をマ
ルクス理論との比較や援用をつうじて極めて平易な筆に
たくしている。また、この問題は第三部のマルクス主義
とサルトルの項で大いに展開説明されることになるので
あるが、「全体的観点に立たなければ歴史の理解は出来
ないにしても、同時に現実の人間が忘れられてはなら
ない……サルトルが教条主義的マルキストを批判するのは、

集団と集列体、融合集団、誓約集団、組織集団、制度集
団と集団の弁証法的発展過程がある述べられ、この集団
論がきわめて野心的な意図にもかわらず、必ずしもパ
ーフェクトな形に至らなかつた点を、著者はかなりサル
トルに好意的な態度ながらも、一応批判の言葉でくつ
ている。

第三部の1は、サルトルが何故に個人的実存の立場を
放棄せざるを得なかつたのが、マルクス主義との比較
に於いて、サルトル思想の発展過程を追って順次説明さ
れる。ここで、著者は「サルトルのいう革命家のレアリ
ズムが、世界と主体性とをひとしく要求する『存在と無』
の延長線上にあることが知られる。……革命家は世界の
のそとに主体性を認めることを拒むとともに、主体性の
努力によって説明されえない世界を認めることを拒む。
われわれは主体性と世界とが切り離すことのできない全
体として、具体的実践の相においてとらえられていると
ころこそ、サルトルの自由論があるのを知ることがで
きる。」と語り、サルトル的革命観への信頼と期待を垣
間見せている。しかも、こうした著書にありがちなう
ずった調子や過度な興奮を抑えた、たんとした解釈
の陳述であり、マルクス主義・スターリン主義・エンゲ
ルスの史観等とサルトルの距離関係が鮮かに描写されて

とくにこの点についてであった。という見解はサルトル
のときというよりは、むしろ著者自身の見解でもあること
を想起させるほどに、著者を通じて幾度も、表現を変
えながら表明される。また、例えば「人間は、よし、そ
の歴史がどのようなものになるにせよ、各人が、各自の
意識的に意欲している目的をおうことによってこの歴史
をつくる。そして、これらのいろいろの方向に働く多く
の意志の外界にたいする、これらの意志の多種多様の働
きか力の合成結果が、まさに歴史なのである。歴史のな
かで働いている多くの意志は、たいして、意欲された結
果とはまったくことなる結果を——しばしばそれとは正
反対の結果をもたらすものである。したがって個々の意
志の動機は、いずれもおなじく、そこに起った結果全体
に対しては副次的な意義しかもっていない。」とエンゲ
ルスが「フォイエール論」のなかで語っていること
に、筆者などはまことに素朴なる共感を覚えずにはいら
れない、単純思考の持主なのであるが、この件について
だけは著者のまことに懇切丁寧なる御説明にもかわら
ず、サルトルはエンゲルスのいう歴史を動かす隠れた法
則をどのように価値評価しているのかが充分に理解出来
ないのである。この辺りが、ロジックではなく、気分で
しかものが把握出来ぬ人間の弱みなのであるが。その他

いる。紙数の都合上、第四部の概観に移りたい。著者は
ここで総括的にサルトルの文学を概らあげ、文学者サル
トルの挫折という形でしめくくっているかに見受けら
れる。但し、「われわれはサルトルの哲学を……前後期の立場
のあいだに大きな矛盾を見いだすことはできないのでは
ないか」ということを確認することが出来たと思ってい
る。」という著者の見解は、「哲学者のものとして、宜なる
かなの感を禁じえないが、「この文学の特性はただちに
文学の限界でもあった……サルトルの文学作品がともに
減少したのも、その原因の一端はここにあるといえるで
あろう。」とあるように、こうしたサルトルの前後期に
わたる変身自体に、文学畑の我々としては残念乍らサル
トル思想の大いなる湾曲を感じるのも事実である。従来
サルトルの初期の思想体系の堅牢さに比して、後期のも
のには確かに論理的緻密性、合理性においてすぐれたも
のを感じながらも、その脆弱さをも感じていたのである
が、一つには、現象学的存在論なるものが、半ば体験可
能な理論であるのに対し、その発展の果実である弁証法
的理性批判以降の物は、はるかに抽象性を多く含んだ
ロジックであるが故に、論理の空回りに似たものを露
呈していたかに覚えていたのであった。こうした感慨を
抱かしめる一つの理由を、文学を捨てたという事実のな

かに求めるとすれば、すなわち、拠って立つ立場が大きく変化したサルトルの活動、例えば、芸術↓倫理的立場↓善の立場、無償性↓合目的性、ニヒリズム↓科学的唯物論、心理学↓人救い主義へのゆるやかなメアランダールを感覚的に（ロジックを別として）感じざるをえないわけである。しかし、著者がこの項のしめくりとして、フアン・ガージェマンを政治的と文学的に厳然と区別し、文学と政治のかかり合いを論じ、サルトルという一個体の中で引き裂かれた観念が互いに相克する機能事態をサルトルの全体化の思想の基本的契機であると断ずる時、我々はこの著者が、いかに深い思いやりをもってサルトルを覗てきたかを改めて感じざるをえないのである。思い込みがいの読み方をした部分もあったかも知れないが、そうだとすれば責任はすべて読者にある。それほどにこの著書は深い理解、該博な知識、不偏不党のサルトルのエスプリに支えられ、きわめて平明な表現でサルトルの全体像を、あるときは鳥瞰し、またあるときは虫瞰しながら網羅している。サルトル理解と現代哲学への啓蒙書として好個の一冊となる運命を感じる。

（仏文科助教授・かわかみ てつひる）



海辺に坐る女

■研究余瀟——ボードレール 1

ボードレールとパリ（その一）

山村 嘉 己



ボードレール
アレクサンドルラフォン筆

シャルル・ボードレール (Charles Baudelaire) 一八二二年パリに生まれ、一八六七年パリに死す。この人の生涯はごくわずかな期間をのぞいては、まさしくパリの内に終始した。残した作品はいくつかの文学批評、芸術論を別にすると、詩集『悪の華』が一冊あるのみ（もともと、散文詩集『パリの憂鬱』を出版することによい望みをもっていたが、ついに果さず万斛の恨を残したこ

とを忘れてはならない)。しかし、かれの反俗の生きざまは『ボードレールリズム』といわれる独得の伝説となり、さらにその弟子を自称するヴェルレーヌ、ランボールの奇行によって一層増幅されて今日にいたっている。そのため、『悪の華』もまたその奇行の詩人の異常なヴィジョンを盛りこんだ異端の書として遇される傾向が多分にあった。わが国においても、上田敏の講壇的姿勢による紹介はともかく、永井荷風、萩原朔太郎、大手拓次らをつなぐ詩人たちのボードレール受容には少くとも、実社会の無理解に苦悩の生涯を送らねばならない近代の芸術

家といった面影が正面に押し出されている。
事象、ポードレルが自らを天界から落された巨大な
「あほう鳥」に比し、

詩人もこの空の王者そのまま
嵐とたわむれ 射手など笑いとばす勢いも
喧騒のこの世の土に追われては
大きな翼もてあまし 歩くことすらもうかなわぬ

と歌ったことは有名であり、その詩人の心を全面におお
う Spleen (憂愁) の色調はこの詩集のいたるところに見
受けられる。

空が蓋のように 低く重たく
久しく倦怠のなかに呻く精神におおいかかり
とりまく地平 一ぱいにひろがって
夜よりも暗い昼をぼくらに流しかける その時

大地が湿った土率と化して
希望は こもりに似て 臆病に
羽ばたき 壁をかすめ
崩れる天井に頭をぶちつける その時

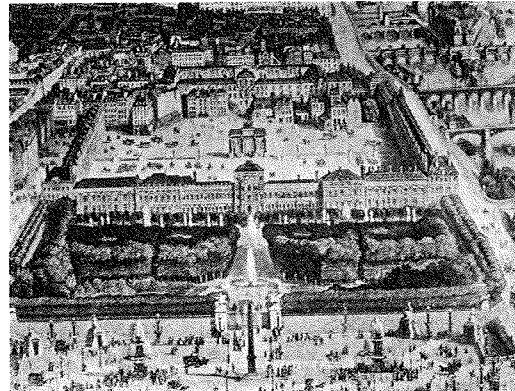
さらに 雨が降りしきって 牢獄の
鉄格子さながら 人々を降りこめ
折しも ぼくらの脳髓の奥に 忌わしのくも
一群あらわれて その巢をはりわたす その時

突如 はげしく鳴りひびく鐘の音は
空向けて 恐しい唸りを投げかける
故園もなく さまよい歩く精神の
執拗に呻きはじめるそのさまと同じく

―そして今 長い葬儀の列だ 太鼓も楽の
音もなく

しずしずとぼくの魂のなかを通りすぎる
希望は打ちのめされ 涙し 苦惱は残酷にも勝ち誇り
ぼくのうなだれた頭蓋に黒い半旗をうち立てる

その他、「ぼくの魂は墓穴だ、悪僧のぼくが住みつい
てすでに久しい」「悪僧」、「こは見渡すかぎり鉛に
閉ざされた寒々とした世界、夜もすがら漂うは畏怖と冒
瀆」「深き処より主よ」、「ぼくは月光に呪われた墓場、
悔恨にも似た長い蛆虫がはいまわり」「憂愁」などなど
類似のものは枚挙にいとまがなく、それと同時に、この



1846年のパリの眺望

憂愁の心がもたらすふしぎに甘く切ない吐息に似た詩篇の一
例にもけっしてことかかない。「時は今 花はわななき
香炉とかおり、音と香気と夕ぐれの大気に溶ける ああ
悩ましいワルツ、ものうい眩惑」「夕べの諧調」、「ぼく
らはやがて 冷たい闇に沈むだろう さようなら短かす
ぎたぼくらの夏の明るい陽ざしよ、中庭の敷石に 忌わ
い音をたてて落ちる枯木の音が聞えないか」「秋の歌」、
「見よ瀕死の太陽は橋桁のもとに眠り、東方はか尾を
ひく長い屍衣のように 静かに夜が迫り来る 聞け 恋
人よ 夜の足音を」(「静思」)。

2

かくて、われわれの多くにとって、「悪の華」は久し
く近代人の苦悩の告解書であり、またその苦悩をいやす
鎮魂の調べでもあったのだが、種々の研究が進むにつれ
て、このいささかロマンチックにすぎないポードレル像
はかなりの修正を余儀なくされはじめた。とくに問題と
なったのはかれの恐しいまでの批評意識で、かれの実生
活の指導原理であったダンディズムも、けっしてたんな
る身だしなみの規律であるよりも、もっと深くかれ自身
の内部に擬したきびしい道徳的戒律であったことが明ら

かにされ、かの「ポードレール」もすべて微細な計算による演出とすら思われるようになって行ったが、それとともに、作品の世界ではさらに意識的な操作がなされていくことがよほど明らかにされたのであった。

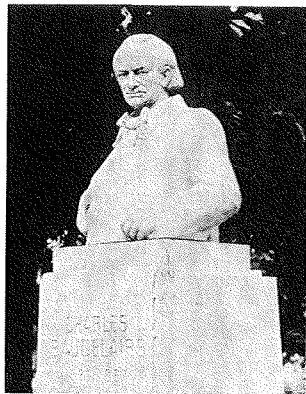
たとえば『悪の華』の構成がそうである。

もともとの詩集がたんなる詩人の生涯の一里塚といった意味のある時期、ある時期の詩の生成ではなく、まさに詩人の全生涯、全思想をかけた一冊きりの、「大文字での Poésie」(福永武彦「ポードレルの世界」)であり、「季節」というよりは季節の推移である風土(同上)を作りあげていることはつとに指摘されていたことであるが、初版(一八五七)を例にとってみても、先ず序詩「読者に」、人々の心に喰食う悪徳のなかでも「大げさな身ぶりもせず、声高く叫びもせぬが、それでもあくび一つで世界をのみ込む」倦怠の恐ろしさを紹介し、その倦怠にさいなまれ憂愁(Decein)の世界に落ち込みつつも、つねにそこから脱出を夢みてやまぬ近代人の根源的(根源)に異開してみせる。つづいて第二章「悪の華」(二二篇)、第三章「叛逆」(三篇)、第四章「酒」(五篇)、と順を追ってこの憂愁という人間の基本的条件から逃れようとする人間の努力を描くが、ついには終章「死」(三篇)

これほどの意志と計算をもって詩集が構成されたことは以前も以後もほとんどない。それゆえ、初版発表の直後かれを襲った当局の検閲と処罰は、ポードレルにとってはかれの世界そのものの解体を意味したことは想像にかたない。それとともに、新たな世界の再構築をかれはひたすら願うことになった。数々の努力の後、新たな詩篇を加えた再版『悪の華』がふたたびかれの抱負を背負って登場する(一八六二)。

この再版の構成も、もちろん根本的には初版とは異っているのではない、かれの精神世界が根源的に覆るはずはないのだから。しかし、目立って異なる点が少くとも二つある。それは先ず第二章に「巴里情景」(二八篇)が新しくつけ加えられたこと、詩集の最後に「航海」という長詩がおかれたことである(詩篇の数が一二六に増え第三章「酒」(五篇)、第四章「悪の華」(九篇)、第五章「叛逆」(三篇)、第六章「死」(二篇)と順序にいざさか変動のあったことはこの際大きな問題とはなるまい)。

先ず第一の「巴里情景」の新たな登場は、ポードレルにとってパリがようやくかれにとって、近代人の生活の条件をもっとも典型的にあらわす場所であるとの確信ができたこと(すでに『一八四六年のサロン』の序で、パリは「世界全体の公衆のすむ街」といっている)、そし



ポードレルの胸像 フィックス・マソー作

にいたって、現世のなかに逃れる術をもたぬ人はただ死のなかに安住の地を見出すしかないことを暗示しながら幕を閉じる。もともと、最後におかれた「芸術家たちの死」が芸術の完成に最後の償いを求める意識をはらませていることを忘れてはならないが。

ただ一つ奇妙な暗い祭り処、希望が残る

死が新しい太陽のように空にかかり

かれらの脳髓に、いっぱい花を咲かせるだろうと。

それゆえにこそ、かれの考える近代人の基本条件、憂愁の姿がもっとも具体的にあらわれている処となったことを示し、第二の「航海」は最後の二連

おお死よ、老船长よ、今こそ時だ、錨をあげよ、
この困にはもうあきた、おお死よ、船出しよう、
たとえ空と海は墨のように黒く荒れても

お前も承知のぼくらの心は光にいっぱい溢れている。

ぼくらを元気づけるため、お前の毒をこそせげ、

こんなにも脳髓をやく火のために、ぼくらは

天国か地獄かは問わず、ただ深淵にとびこみたい

「未知」の底に新しいものを見出すために、

が、たんに芸術的な完成よりは、むしろ新しい冒険を求めてもう一度出発し直そうとするポードレルの心境の変化を暗示していることが問題となる。

この二つの問題は今もなおポードレル研究家にとつては論議的的となつているが、ここでは先ず第一のパリの意味についてかんたんにふれておきたい。

パリがポードレルにとつて近代人のあり方をもっとも具体的に示す場所であつて、それゆゑに再版『悪の華』では『巴里情景』が大きい意味をもちうることはすでに言つた。しかし、パリはポードレルの心の中ではさらにふくらみつつける。それはかれが晩年『巴里の憂愁』(Splein de Paris)と名づける散文詩集の完成につよく心を用いていたことでさらに明瞭になる。この詩集はかれの早い死にづいに存命中には完成せず、かれの死後友人たちの手で出版されたため(一八六九、はたしてかれが思つていた形で仕上げられているかどうかには多くの疑問がある。そのため従来では『悪の華』ほどの重要性を与えられず、とくに散文詩という特異な形式をもつていたために、どちらかといへばすでに詩想の枯渇しはじめた徴候ではないかとすら考えられる傾向にあつた。実際は六二年、『ラ・プレス』紙にまとめて発表の機会を与えられたとき、かれ自身が附した序文の手紙のなかで次のようにいつているにもかかわらず、人々は最初この文章の意味を深く考えようとはしなかつたのである。

らなのです。

ここからうかがえるのは、散文詩はポードレルにとつて必然の形式であり、パリとの接触が否応なくかれにこの形式の採用をうながしたという事実である。ポードレルがパリの街にかれのいう『現代生活のヒロイズム』の詩を認め、それを丹念に拾ひ集めようとしていたことは、すでに『一八四六年のサロン』に明瞭に示され、そこでバルザック『熱烈な讃歌を送っていることも知られている。』新しい時代の情熱には固有の美がある。これを主張するかれは、『大都會の地下にうごめく多数の浮浪人たちのなかにならず、現代生活のヒロイズム』は溢れているというのである。問題はそれを拾ひあげ、それにふさわしい形式でいかに芸術的に表現するかということであつた。かれのいう『詩的散文の奇蹟』はこのために呼び出されたものにほかなるまい。いかに冒険を試みて韻文で表現するかぎり、『現代性』は影をひそめてしまふし、とつて散文はまたあまりにも現実に密着しすぎてかれの望むヒロイズムつまり、古典性、芸術性を描き出すことはできない。現実の素材の卑少さにたえて、それに永遠の面影を与えるにはまさしく詩的散文の奇蹟を待つしかなかつたのである。



1840年頃のカルチュエ・ラタン風景

律動も脚韻もなく、十分に音楽的であり、魂の抒情的な運動にも、空想の動きにも、意識の飛躍にも適するような、十分に柔軟でありながら、しかも十分に硬質な詩的散文の奇蹟を、野望に燃えた日々にも夢みながら、ぼくたちのうちにはたして一人でもいるでしょうか。

この心につきまといつて離れぬ理想が生まれたのは、なによりも先ず、巨大な都會に足繁く出没したからであり、その中に生きる無数の人々相互の複雑な交錯か

かくて散文詩集『巴里の憂愁』は必然的に登場することになるが、ここでわれわれは「先ず『巴里情景』の世界をのぞいてポードレルにとつてパリはいかなる街であつたかをたしかめておくことから始めたい。

4

『巴里情景』の冒頭には『風景』という詩がおかれ、ここでポードレルはかれの詩法をはっきり宣言する。

ぼく自身の牧歌をきよらかに制作するため
古星術師のように空近く身を横たえ

……

遺戸を閉め カーテンをおろし

ひたすら夜の中に妖精の宮殿を築くのだ

……

なぜなら、ぼくの意志で「春」を呼び起し

心の中から太陽をひき出し

燃え上る思想で暖かい雰囲気を作り出す

そんな悦楽の中に、ぼくはいつまでもひたつて

いたいのだから。

つまり、ポードレールにとっては現実とは直接に生きらるものというよりは、そこにひたり、その本質をつかみ出してやるものとして存在する。したがって、パリの街を赤裸にすることは、そのまま自らの心を赤裸にすることであり、自らの心をぞいでみれば、そこにパリの群衆はひしめいているのであった。「群衆と孤独、勤勉でみのり豊かな詩人の手になると、これらは対の言葉で意味交換をなすうるものだ」(散文詩「群衆」)と、かれ自身もいっている。

かくて自らの詩法を確立した詩人は朝の太陽とともにおき出てパリの巷をくまなく訪れることになる。そしてそこで目にする存在はといえば、「赤毛の乞食女」であり、「小さな老婆たち」であり、「盲人たち」といった卑しい恵まれぬ存在ばかりであった。しかし、何度もうくり返すように、この人々のなかに「永遠」につながる何ものかを見出すことが詩人のつとめなのだ。誰もが引用する「通りがかりの女に」にはかれの詩法のメカニズムがもつとも明瞭に看取される。

街はぼくのまわりでわめいていた 耳も聳せん
ばかりに
背が高く ほっそりと すき間のない喪服姿で

ありふれた現実には永遠の生命を与える一種の呪術といえようが、ペンヤミンも指摘するように(ポードレールにおける第二帝政期のパリ)、アレゴリーの採用こそこの呪術の大きな秘密であった。つぎに訳し出す「白鳥」はそういう意味でのポードレールの作品の一大傑作であろう。

アンドロマケイよ おんみのことがしのばれてなら
ぬノ

カルーゼルの新広場を横切ろうとしたとき
突然 あらわれて私の豊かな記憶をみたしたのは

あの川だ
かつて 夫を失ったおんみの悲しみを 限りなく
壮麗に映した

あの小川 あわれにもかなしい鏡
おんみの涙に水かさをましたあの偽りのシモイス川だ。
古いパリはもはやない。(街の姿は ああ

何と早くかわるのか 人の心も及ばぬほどに)
今は心のなかにしか見えぬあの立ちならぶバラック
荒削りのままの柱頭や門柱の群れ

ああ威厳ある苦惱よ
ひとりの女が通りすぎた あでやかな手に
スカートの緑飾り 花模様をもちあげようち
ふりながら

軽やかで 品よく 彫像のような足をして。
ぼくはといえば 狂人のように身をひきつらせ、
嵐をはらむ純色の空 その眼のなかに飲んでいた
心とろかす甘美さと 命を奪う快楽とを。

一瞬の閃光……それから夜ノ——東の間の美女よ
その眼ざして 突然 ぼくをよみがえらせた女よ
ぼくはもう君に会えぬのか 永遠のなかでしか?

どこか他処で 遠く離れてノ いや遅すぎる
恐らく二度とノ

なぜなら 君がどこに行くのかぼくは知らず
君もぼくの行先を知らぬ
ああ ぼくが愛しただろう君 ああ それを
知っていた君よノ

この薄明のなかにたゆたうようなふしぎな存在感は、

雑草が生え 溜り水には昔むした大きな石材
そして ガラス窓に光るがらくたの山

そこには むかし見世物小屋が並んでいた
そこで ある朝 私は見た 冷たく暗れた空の下
「労働」が起き出し 静かな大気に
ごみ集めの音が重苦しく響きわたる その時

私は見た 檻から脱け出した一羽の白鳥を
それは 水かきのついた脚で 乾いた敷石を
かき進らしり
でこぼこ道に白い羽をひきずるばかり

そして 水もない溝にたちより くちばしを開け
いらいらと 埃で羽をつくろいながらいうのだった
美しい生まれ故郷の湖をはるばると夢みて。
「ところで雨よ いつ降るのだ 雷よ いつ
鳴りわたるのだ」
ああ 今も目に残るあわれな鳥 ふしぎな
宿命の神話が

時に オウイディウスの人間さながら 空に向け

むごいほど青くすみ 喘げるような空に向け
貧るように首をふるわせ 頭をさしのべるのを
そればまるで神を呪ってやまぬかのようだ。

II

パリは変わった！ だがしかし 私の心の憂い、

の中では

何一つ動きはしなかった！ できたての宮殿も

尼場も 石材も

昔からの街角も 私にはすべてが寓意となった
なつかしい思い出が岩のように重くのしかかる

かくてこのルーヴルを前にして一つの面影が

胸に落ちこむ

それはあの白鳥 図体は大きい馬鹿げた身ぶり

流刑人さながら 滑稽ながらも気高い

たえまなく欲望にさいなまれてるあの鳥だ。

それにおんみアンドロマケーよ 偉大な夫の腕から

傲慢なビリュスの手におちた ああ卑しい家畜

空っぽの墓のそばで 身もだえして泣いた

ヘクトールの妻で ああ しがもヘレニュースの妻の

おんみだ。

さらに思うのはあの黒人の女 やせて肺病やみで
泥の中をよろめき歩き 眠だけはけわしく

はてしない濃霧の壁のその奥に はるか

アフリカの幻の椰子の実を求めてやまぬあの女

さらにまた 誰といわず二度ともどらぬものを

失った人々

やさしい狼の乳首のように 苦悩にすがり

涙に渴きをいやす人々

花のようにしぼんで行くやせた孤児たち。

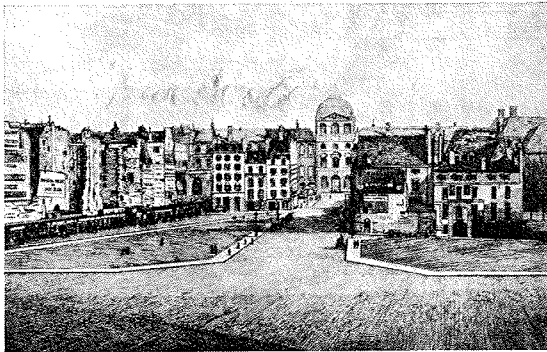
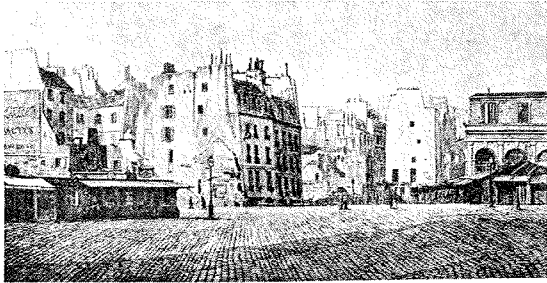
かくて私の精神の追放された森の中に

古い「想い出」は高らかに角笛を吹く！

そして私は想い出す 孤島にとり残された水夫たち

囚われ人、敗残者……さらにまた多くの人々。

長い詩ではあるが、これほどポードレルの視線のあ
り方をはっきり示す詩は少いと思われたので全部を訳し
出してみた。ただ、当時、パリ市長オスマンの手によっ
て強引な都市計画が遂行され、パリの街路が大きく変貌



1849年のカルーゼル広場

しつづつあった事実を忘れてはならない。民衆のゲリラ化を恐れて街路はすべて見通しのきく大通りにかえられた。ポードレルが先輩のゴーチェやネルヴァルたと好んで遊歩したデュイルリーの裏通りも、新しいカルーゼル通りの開通によって無慈悲にとり払われてしまった。多くのなつかしいバリが消失しつつあるのだ。そこでポードレルは自らの精神の世界にこの消え行くバリを固定しようとしたのであった。そしてそれだけがこの移ろいやすい現実をよく永遠に昇華させる秘法となるはずであった。

そこですでに述べた表現の方法が問題となる。この詩のあちこちに顔を出しているいくつかのイメージからも想像できるように、ポードレルは「散文的な由来の語のみならず都市的な由来の語をも抒情詩のなかに利用した」(『ベンヤミン前掲書』最初の詩人であったが、それでもなお従来の韻文詩の世界ではとうてい扱い切れない素材が溢れる現実を前にしては、ここに思い切った新しい「詩的散文」による創作を考えないではおれなくなった。『巴里の憂愁』はまさしくそのような過程のなかに生まれたものであった。次回には筆を改めてこの散文詩集に扱われたかれの世界を考えてみよう。

(文学部教授・やまむら よしみ)

日本中国

ことばの来^ゆ往^り

その1

芝 田 稔

一 はじめに

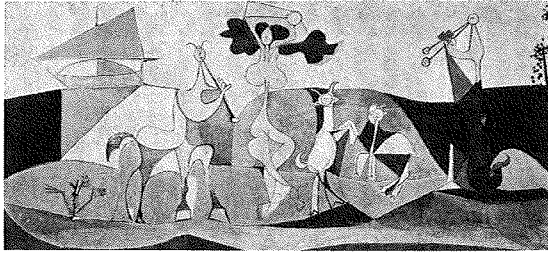
初めにお断りしておかねばならないのだが、この稿は論文でもなければ評論を試みるつもりもない。それで、この稿が『書評』誌の名にふさわしい体を成すように書いていけるかどうか、甚だ心もとない次第である。ただことばというものについて、多少なりとも関心を抱きながら、中国のことばや文章を学び、中国の新聞や雑誌、小説や戯曲、伝説や民謡などを、手当り次第に読んでみると、思いがけないところで、ことばのもつ不思議な魅力にとりつかれることが、しばしばある。それは日本語

と中国語という異質の言語でありながら、同じ漢字で表記されている特殊な関係からおこる「ことばの遊び」にも似ているのである。

この稿では、そのような遊びの広場を求めて、のびのびと自由に、かけめぐってみたいのである。

二 同音のいたすら

いうまでもなく、ことばというものは、人の音声によって人の意志を表現し伝達するものであるから、基本的には語音だけで十分に事足りる、という考えを起点として出発することにした。



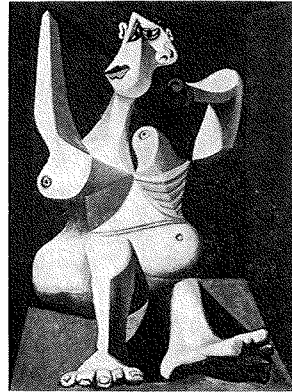
生きる喜び

のであるが、いくら待っても帰って来ない。手持無沙汰でいららして来たのはA君である。そんなところへ、せきもあわでもせず、悠然たる態度で、B君が帰って来た。しかもハンマーらしきものさへ持っているのなのだ。A君はますます腹立たしくなって来る。ところが、B君はしたり顔で、カエルを一匹、A君の目の前に差し出したのだか



坐る女

さて、語音だけを頼りにしていることが、森羅万象全ての事物を、それぞれ異なった語音で表現することは不可能である。だから語音で表わす形は一つであるが、たくさん意味をもつ。例えば「きかん」という語音をもつことが、いくとおりの意味に分れるかを調べてみよう。『広辞苑』では二十種類、『日本国語大辞典』では二十九種類にのぼる。つまり漢字で「きかん」ということばを表記すると、以上の種類に分れるのである。われわれはこの言語現象を、同音異義のことばと呼んでいる。



梳る裸婦

る。こうした言語現象が、日本語と中国語との間で起ると、意味の取り違いもいところで、よく笑い話のたねになるのである。一、二の例をあげよう。これは、戦前、中国は東北地方のある工事現場で聞いた話である。A君はその時、中国人労働者十数人と一緒に土木作業の最中であつた。A君……「ハンマー・ナイライ（ハンマー拿来ハンマーをもつて来い）」——大声で指図した。すると、一番遠くにいた中国人労働者の一人B君が……「ハオ(好)よっし」といって、腰軽く立って行った。

らたまらない。

「バカノ」A君は思わず怒鳴りつけたのである。

B君は不思議そうに目をパチクリ……「一匹さがすだけでも、こんなに時間がかかったのに、八匹なんて、もうお断りだ」という意味の答えをしたそうである。つまりB君はA君の最後のことを「八個」と聞いたのであるが、事の起りは「ハンマー(鉄槌)」と「ハイマ(蛤蟆)」かえる」にあつたのである。

もう一つ。これは語学検定の口頭試問の際に、受験者である筆者が正しいことばを知らなかったおかげで、却って正しい回答ができたという話である。昭和も二桁に入った頃には、中国の東北地方にいた日本人の間では、中国語熱が高まりつつあつた。また一方では、それを奨励する検定試験制度もすでに確立されていた。ある現地の大会社には、社員が中国語の上級試験に合格すれば、北京留学または同文書院へ委託学生として派遣する制度さえあつたのである。

さて、話は試験場でのこと。中国語を習い始めてからまだ半年ほどしか経ってはいなかったので、もちろん初級の試験である。筆記試験には合格したものの、口頭試問は難関だ。姓名が確認され、矢つぞ早やに簡単な試問がつづく。あやふやながら、なんとか持ちこたえてきたの

であるが、試験官が次の問いを発した時には一瞬たじろいだ。

その質問は……「鮮果子里頭、有什么様児呢」というのである。上の句の「くだもの中」は判っているが、問題は下の句。その最初の二語「有什么―何があるのか」だけが聞き取れたが、下の一語「様児」が意識の中に入ってきた。

咄嗟に「くだもの中」に、何かあるのか」と早合点してしまったのだ。くだもの中に「実」と「種」があるのだが、このどちらも、どういえばよいのか知らない。#万事休す^カである。

「実」と「種」。ままとばかり、中国音で読める「実」の方をとって、大声で「シーズ」。すると、意外や意外、試験官の一人が……「還有什麼」そのほかに？」とたたみかけてきた。

あとは、もう「種」しかない。絶対絶命だ。急に顔面が紅潮して来るのを覚えた時、試験官はもう一度、ゆっくりした口調で質問してくれたのである。

今度は文末の「様児」がハッキリと聞き取れた。これは「実」や「種」の事を聞いているのではなく「種類」の事を聞いているのではないか。

さきに「実」のつもりで答えた「シーズ」ということ

ばは、実は「柿子^カかき」のことであったのだ。ここでやっと我に返えり、知っている限りの、くだもの名を答えたことはいうまでもない。

怪我の功名とは、正にこのことであろうが、これも同音異義から起ることばのいたずらである。こんなに調子のよいいたずらは、語学をやっているものにとって、或種のはげみともなるのであるが、そうザラにぶつかるものではない。ぶつかるのはむしろ失敗談の方が遙かに多いのである。(つづく)

(中国文学科教授・しばた みのる)



三人の踊り子

差別落書問題をめぐって ①

田宮 武

丈夫な者は嘘ばかりだ

差別落書についての共

通討議資料を作ろうという作成委員会の席上で、九州の筑豊の炭坑地帯で、かってこんなことわざが語りつがれていたと聞いた。

道は首に聞きやれ

理屈は壁に聞きやれ

丈夫な者は嘘ばかりだ

なんでも坑夫の生活の中で生まれて語りつづけられてきたことわざであり、あるいは俚諺(りげん)とのことだが、そこに庶民の、とりわけ差別と抑圧の中で生きぬこうとしてもがいた人間の告発の叫びを聞きとることができるとはないだろうか。

毎日新聞記者の八木晃介が書いた『差別糾弾』(社会評論社)のあとがきを読んでいると、基本的にはまったく同じ思いをこめた鹿児島地方のことわざに出くわして民衆がいだいていたまっとうに生きたいという願いと、その願いをふみにじろうとする者に対する怒りとを、自分の日常経験に則してもわかるような気持ちがあった。鹿児島の方で語られるそれは、

歌は 壁(む)にききやい

道(みち) めくらにききやい

理屈(りくつ)や つんばにききやい

丈夫(ちゆうぶ)なやちや いいごっぱっかい

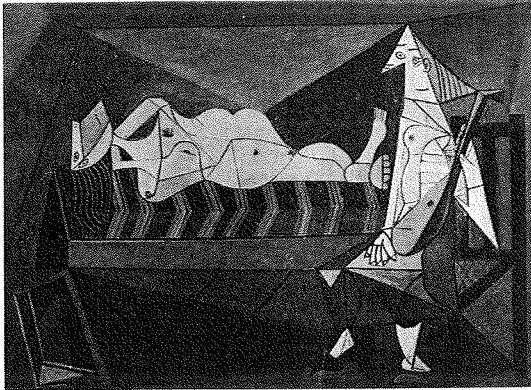
八木晃介はこの俚諺について、『丈夫なやつ』(権力

者と、これに追踵する差別者はいつの世でも、『いいごっぱっかい』(都合のいいことばっかり)並べたてるものである。被差別者はそのつど、歌を奪われる怨み、道を奪われる痛み、理屈を踏みにじられる憎悪をその内面に積み上げてきた(「二三ページ」と、差別糾弾の思想と行動とのからみで感想を述べている)。

差別落書に関する共通討議資料の作成にあたって、どのような内容をもりこむべきかといった編集の基本方針を話し合っていた時に、はじめて先の筑豊のことわざを耳にした。その時は、差別落書の問題を考えるにあたって、落書の対象にされてその人権をふみにじられている被差別者の立場・視点に立って差別落書の持つ意味を明らかにしていく必要があるという風に受け取っていた。

今から思い起こしてみると、そのことわざの中にある民衆が権力者に対して積みあげてきた怨み、辛み、なによりも差別用語を用いてまでの聞き直りのかまへの内にみられた開いへの姿勢を必ずしも十分に分かつたわけではなかったし、今もその自信はついていないように思う。

しかし、筑豊の、鹿児島島のいずれのことわざをも締めくくっている「丈夫な者は嘘ばっかりだ」とか「丈夫なやっちゃいいごっぱっかい」という最後の一行については、自分が体験した近ごろの状況とひきあわせてみる



調の朝

と、だんだんになるほどと納得できるようになってくる。一見すると、民衆の口からこぼれる愚痴とも受けとれる最後の一行だが、そうではなくて、権力者によって体よくあしらわれ、だまされつつ生きてきたことに対していたでであろう民衆の不甲斐ないという気持ちとか、これからはそう簡単にもうだまされないぞという覚悟の心情とか、権力者はいつも民衆に調子の良いことばかりを口先だけでいってはだますものであるという風刺や警告の意味も含まれているように読みとれる。本当にそんな意味があるのかどうか実のところ分らないのだが、そんな風に読みとれるし、読みとりたいということである。

「嘘ばかりだ」の状況 大学は真理探究の場であって、もともと「丈夫な者は嘘ばかりだ」という民衆の告発をまともに受けるような存在ではないだろうと思いつこんでいたのだが、最近の大学の動きを見ていると、「いいごっぱっかい」の口先だけのリップ・サービスが先行して、結局のところはごまかして、そのごまかしを「合理化」していく状況が起こっているのではないだろうか。

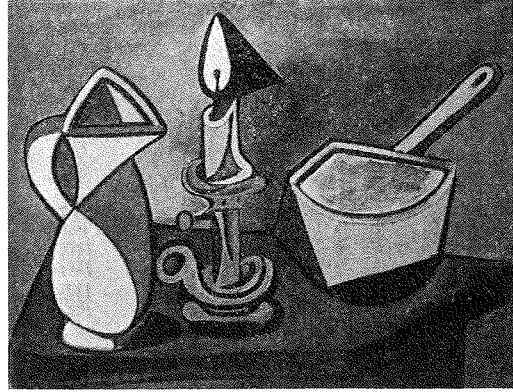
「関大通信速報」No.10九の中で、被差別者が深刻な生活破壊の局面に立たされ、その中で生きている児童は

さらに希望のもてない状況に追いこまれているという現状認識を表明していく一方で、大幅な学費値上げを実施していく。差別の現実学ぶことが大切であると調子の良いことをいっておきながら、学費値上げの説明会を開催して、教職員・学生の声を聞くとうもしない、学費値上げと大学の解放教育への取り組み方針との間に矛盾があると認めながら、その矛盾を解決しようとするどころか、むしろ拡大再生産していく。

学費値上げの前に起こった共通討議資料の回収問題にしてもまったく同じ「嘘ばかりだ」といいたいような状況であるといえるだろう。ここでは、共通討議資料「人権意識を高めるために―差別落書の問題をめぐって―」という、新書判九五ページの小冊子の作成、配布、回収、再配布という事実経過について少しふりかえってみたい。

今春発行されたパンフレット『部落問題と大学』によると、「VII 関西大学と部落問題」の中で、共通討議資料にかかわる項目が二つ記録されていて、一九七八年十一月五日 共通討議資料作成委員会が設置される。

一九七九年二月二八日 共通討議資料作成委員会において『共通討議資料』が作成される。



ほうろう引きのシチュー鍋

とある。二つの項目とも客観的な事実であることには違いないが、その半面、意識的にか、スペースの関係でか、取りあげられなかった客観的な事実もある。それは資料作成を依頼した前学長の手による共通討議資料の回収という事件である。

大学が解放教育に取り組むという公的見解のすばらしさからは、自らの公言を自らの手で否定していくという事態はそう簡単に想像できないことであった。

先の『部落問題と大学』の説明にあるように、一九七九年二月二日差別落書に関する共通討議資料の原稿ができあがり、その後五月一日付で印刷された。教職員に配布して各学部・部署のできるだけ小さい教職員グループで共同討議するという、当初の全学的決定にもとづいて、各学部事務室へ一〇日ごろ一括して配布された。ところが、配布後数日を経ない一五日ごろ、前学長が突然に「配布中止、回取」の措置命令を下した。学部長会議の席上において、前学長は「学長としてしばらく考えたことがあるので、手元にとどめおきたい」と説明したといわれる。また、今回の回収措置については学長の職を賭けているという趣旨の強い信念をもちもされたとも聞かれた。

差別落書の起こる背景、その社会的意味とか落書を解

消していく方法などについて検討していく共通討議資料

の作成を依頼した前学長が、できあがった原稿の内容に目をおして「立派な内容で喜んでいる」という好意的評価をしたのにもかわららず、まったく不明確で、納得できない、「ツルの一声」というか「サギの一声」で回収した事態については、驚きと同時に腹立たしさと不信感を持った。

共通討議資料作成委員会は六月二〇日、二十七日と七月二三日の三回にわたって、回収の理由はなにかをたずねるとともに、回収に抗議し再配布を要請する会合を前学長とともに、「部落地名立鑑」を関西大学が購入した差別事件の折にも感じたことであったが、今回の回収事件も「何のためにそうしたのか」「誰が関係していたのか」といった事実関係については、結局のところ、「敷の中」に今もあって、釈然としないままに終わっている。したがって、誰が何のために回収したのかについては、あれこれ人のうわさが飛びかかったが、前学長と会合したさいのメモによると、次のような不透明な全体像しかわからなかった。

——わたしの一存で急ぎよ(資料を)引きあげさせてもらった。

——(誰かの助言で)回収したのかの質問にたいして)私

の一存です。公式にいえるのは私の一存です。

——おそらく理由にならないことを言って申し訳ないが、ご推測してほしい。私も言えないことがある。

——(再配布をするつもりか)の質問にたいして)しばらく考えさせてほしい。しかるべき人にも相談することもあろうから。

——(前教学部長が発言して)学長が泥をかぶられるときには私もかぶるつもりである。

——一般的にいって、こんな不透明なことがあってはいけない。こんな不透明なことで苦勞するのは、私の性(しょう)に合わない。

また、回収の理由についても、当初は「資料の中に、差別落書を書いた者を本学の学生であると断定しているので、混乱を引き起こすおそれがある」という理由をただ一つあげていた。しかし、関西大学における解放教育への取り組みは、おそらく本学学生が書いたであろう差別落書事件から出発しているの、そうした取り組みの歩みを否定するのではないかなどと話し合っているうちに、その理由をあげることもなくなりました。前学長は第一回会合の当初、難井に回収措置の経過をしゃべり、質問と反論を受けると言いよどみながら、回収の責任を自分ですべて取るという日本的ともいえる姿勢を示

し、結局、肝心の回収事件の事実経過については明確に説明することを終始避けつづけた。

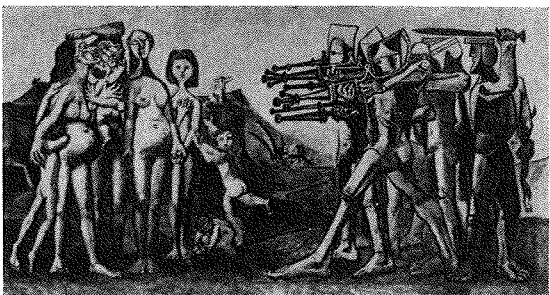
回収は差別につながる 前学長は一九七九年七月六日の学部長懇談会の席上、共通討議資料の再配布を決めたようなメモを読みあげた。

去る五月十五日、一旦、各学部事務室等までお届けしていた「共通討議資料」を、「もうすこし考慮したいから」として突然回収しましたことは、全く私の浅慮のいたすところであり、重大な誤りでありました。このため討議の進捗をいちじるしく遅延せしめる結果になったばかりでなく、資料の作成に関与された方々をはじめ学内に、学長の差別問題に対する基本姿勢に不信の念を懐かしめるにいたりしましたことは、省みて海に慚愧に耐えず、自らを厳しく責めるものでございます。

本日、早速、同資料を各学部事務室等までお届けいたしますので、資料作成を依頼した根本の精神にかんがみ、差別著書の本質・背景等について充分御討議いただき、ひいて差別問題についての本学の取り組みに資せられますよう、衷心よりおねがい申し上げます。

こうして、前学長自身がいったように、「不透明なことを」を残しながら、回収措置の指令を約二か月後に取り上げて、再配布にふみ切った。この間、いざさか個人的な話になるが、学長に五回にわたって抗議および要請のハガキと手紙を出した。また、第一回から第三回までのハガキと手紙をまとめて、「中学長による部落問題パンフの回収に抗議する」というビラを六月二日前後にごく一部の教職員に配布した。腹立ちが先に立って、千数百枚のビラを印刷したが、結局のところ配布できたのはたったの百枚程度にとどまり、腹立ちの気持ちで最後まで持ちこたえられなかった。

前学長が共通討議資料を回収した措置は、①関西大学の解放教育の取り組みに逆行する。②部落解放を願って開っている部落出身学生や多くの学生の声をふみにじる。③学長によって設置された共通討議資料作成委員会の努力をふみにじる。④本の回収は大学の自由、学問の自由思想の自由を侵害するという四点から、それぞれ要請文を書いた。特に第四の点については、当初はかなり一般原則みたな観点からしか考えられなかったが、そのうちに、回収措置は部落解放への願いや思いを抑圧し、差別の温存に手をかす差別的行為なのではないかと思いついた。六月一六日付の、いちばん最後に投函した抗議



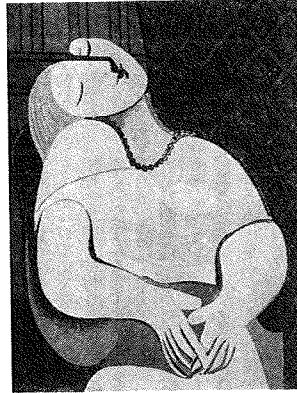
朝 鮮 の 虐 殺

および要請文として、次のような文章を書いた。学長による共通討議資料の回収措置は大学の自由、学問の自由、思想の自由を侵害するものである。

教授会で報告されたところによると、学長は六月六日の学部長会議の席上「今回の措置は学長の一存でとったものであり、この措置に身をかけたている。この措置を変えるつもりはない」旨、述べられたと聞いている。学長の「一存でとった措置」という意思決定自体が、全学の合意をとりつけないながら共通討議資料を作成してきた経過に照らして、きわめて反民主主義、ファシヨ的、独善的姿勢にもとづくものである。

さらに重大なことだが、「差別著書等の問題を解消し、部落差別問題の認識を深める」(部落問題委員会から学長への建言)という意図と内容を持った共通討議資料を配布中止・回収するという措置にみられる学長の姿勢は、明らかに部落解放への思想を弾圧し、差別を温存しようとするものである。いいかえれば、その思想は部落出身学生や被差別者の人権を擁護することにあってはなく、むしろ「差別者」の名誉や利益を守りとおそうとすることに最大の力点を置いている。私はこの考え方を認めるわけにはいかない。もともと、今回の共通討議資料は「はしがき」にある

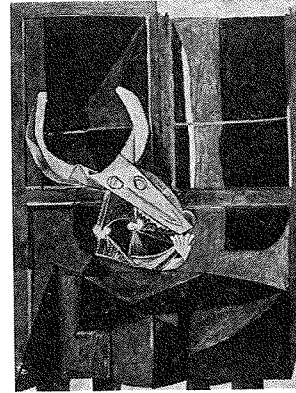
ように、「日頃考えている問題意識や意見、あるいは疑問を率直に出し合い、討論と相互批判を深めていくような形で利用される素材である。学長はじめすべての教職員は資料に異論があれば「あとがき」にあるように「これからの討議を通して内容に対する建設的な意見」を各自出していくことができるものである。多分、最後の要請文になると思うが、すみやかに共通討議資料の再配布を行い、大学にふさわしい形で討論と相互批判の機会を学長自らの手で作られるように要請する。



夢

共通討議資料の回収は、「差別はいけない」とか「部落差別をわがこととして考える」といったタタマエを口にするのはわりと簡単で、それこそ米粒の一〇粒も口に入れればいえるだろうが、そうしたタタマエを内実化していく努力を怠ってしまった結果のように思われる。

共同討議に参加して 一九七九年七月六日、共通討議資料の再配布が決まったことはすでに述べた。その後教職員に配布されて、内容に対する共同討議や今後の方針についても議論されているようである。現在のところ、



牛の頭蓋骨

部落問題委員会へ各学部、各部署での討議結果が報告されている段階であって、この共通討議資料の全学生への配布、教職員と学生による相互討論といった点については具体的に何も決まっていない。いつものことながらの迂余曲折を経ながらでも、学内における差別落書の解消に向けて、全学配布を実現していくことが必要だろうと思われる。

ここで、共通討議資料の内容と編集方針について若干の紹介をすると、まず目次は次のとおり。

はじめに……………1

I 差別落書とコメント……………25

差別落書はなぜ重大な問題として受け止めねばならないか―被差別部落出身学生の心の痛みに学ぶ―

III 討議の論点……………57

(一) 差別落書はなぜ問題なのか……………59

(二) 差別落書に表現された差別現象の理解……………72

参考書リスト……………92

あとがき……………93

この目次からもある程度分かるように、差別落書の問

題を被差別者の立場、視点からとらえなおしてみようということであった。最初に紹介した筑豊のことわざにうたわれている民衆の視点から考えていくことが大切だろう。共通討議資料の「はじめに」の中で、この編集方針について次のように述べている。引用すると、

第一に、本学に生じた具体的な差別事件に学んでいくという視点をとること。この視点から、一九七二年一月以降、学内で確認された三六件に及ぶ差別落書より、典型的と思われるものを抽出して、生のままで提示し、かつ、それぞれの事例の差別性について必要なコメントを付すようにした。

第二に、部落出身学生の心の痛みに学ぶべく、「差別落書はなぜ重大な問題として受け止めねばならないか」というテーマで、出身学生の協力を得て、座談会を持ち、その記録をこの資料の柱とした。

さらに第三に、討議を進めていくための具体的な手引きとなるよう、討議のための若干の論点を整理して提示したが、その場合にも、部落の人々の生の声に学ぶべく、できるだけ総合コース「部落解放論」特別講座で話された内容を引用することにとめた。

内容的にみると、あれこれと記述の手直しをした方が

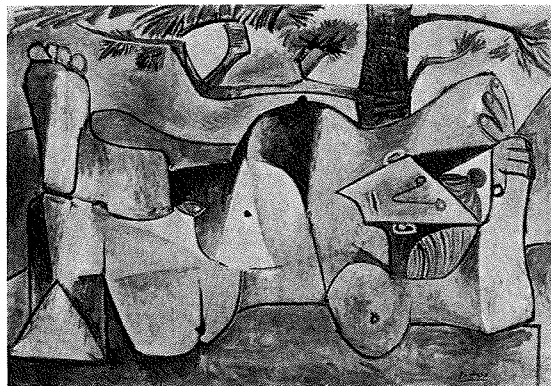
よいところもあるだろう。しかし、差別落書の問題は一部の人のいうように「誰が書いたかもわからへんのに、大学がいちいち責任がとれるものか」とか「便所のようなどころに書かれたものを問題にする必要なんかあらへん」といって、それを黙認しておけるような問題ではなく、あらためてひどい非人間的な差別である点をおさえようとした。それを一貫して、被差別者の立場・視点からとらえようとしたわけである。これに対して、「内容が一方的である」とか「この資料に書かれている考え方が、解放における唯一の方法ではない。したがって解放の方法の諸々の考え方をつけ加えるべきである」とか、いろいろな反論が出ているようであるが、差別落書のよな差別事件を考えるにあたっては、「差別の現実から学ぶ」という基本的な姿勢をくずしてしまおうと、結局のところ、差別問題は見えてこないのではないだろうか。

最後に、一九八〇年四月二八日付の「関西大学新聞」(第三〇〇号)の座談会でしゃべったことでもあるが、再配布された共通討議資料についての教員間の討議に参加してみた感想を書きとめておこう。

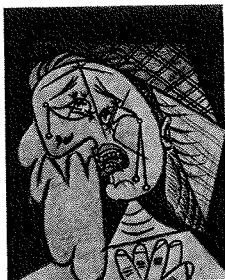
一つは、部落差別の現実に対する十分な認識と部落解放運動の思想と行動についての理解がわたし自身にして弱いことを感じた。たとえば「部落差別をなくしていくのに部落を分散させていく必要がある」といったたぐいの、いわゆる「部落分散論」の間違った考え方を部落解放総合計画の要求とか運動とからませながらほとんど説明できないことに気づいた。一九七三年の学長自己批判書の、「関西大学はその総力をもって部落問題解決のために取り組み」とした、いわば闘いのスローガンの実現に向けて、わたし自身が大学構成メンバーの一人として総力をもって取り組んできたのかを問いかえすことが大切のように思われてくる。

二つ目は、共通討議資料を学生に配布した上で、教員と学生とが討論しあっていくときに、仮定の話で恐縮だが、学生が差別発言をしたら教員がききとその差別性を整理できるか、そんなことよりも教員自身が差別発言をしてしまう危険性はないのかといった疑問と不安がつきまとう。共同討議に参加して感じたことは、教員の今の意識構造からみると、それは「仮定の話」に止まらず現実起こりうるかもしれないという点である。たびかさなる学長自己批判書にもかかわらず、大学総体として持っている不十分性もまた問われなければならないように思う。(つづく)

(社会学部教授・たみや たけし)



松の木の下の標婦



ハンカチを持って泣く女

野間宏著「崩解感覚」

新潮文庫
二二〇円

小田実篤

この「崩解感覚」(作者野間宏・新潮文庫・二二〇円)は、いつ読んでも、自己の全存在にせまってくる何ものか——それは、この小説に何度も出てくる八ぐにやりという言葉に集約できるかもしれない——を感じる、というよりは、受けとめるのを禁じえないのである。この「崩解感覚」は、作家井上光晴をして「自己の生き方を変えさせられた」と言わしめた小説なのである。

主人公及川隆一は、近所に住む大学生の自殺に出会う。その時は次のように思う。

『どうして死んだりしたのだろうか』と彼は廊下の板にスリッパをすりつけるようにして歩きながら考えた。『それは勿論、追いつめられて、穴の中の山猫のように

自分というものを賭けなければ、二律背反の世界には絶対に達しない』と僕は思うのです。『ゾルレン的にみて』『ゾルレン的にみて』……彼は口の中で繰り返す。『ここで、読者は、『学問や思想とは何なのだろうか』と、思い始めるに違いない。文中にも出て来るように、『学問や思想は、何一つ自分を(自分の生命を)生かしてしない』のであろうか? 野間宏は、こういうふうに述べて読者に追い撃ちをかける。

「盗人及び川隆一の兵隊姿が浮んできえる。『これが俺なんだ……これが俺という人間なんだ』くらい姿が黒々と、及川隆一の体におよせてくる。『これが俺なんだよ……これが俺の学問なんだ……そして、結局、学問なんでものは、こんなものなんだ』及川隆一は最近、毎夜のように、夜眠りに入る前に、いつも、閉ざした眼界の中にあらわれてきては、彼の心と身体を焼きつくすかのいやな過去の自分の影像に向って言いつける。『可哀そうにな、ほんとに俺という奴は哀れな人間だな……』ヘーゲルの論理学に於けるヴェルデンの意識についてか……ふん、そして、嘘をついて、戦友のものを取って、ただ、上等兵に殴られるのを恐怖して……そして、とうとう山猫のように穴の奥においつめられて……』

『ゾルレン的にみて……』このような、あの大学生の

追いつめられてだ。追いつめられて次第に呼吸もできなくなつたんだ。……しかし、一体何に追いつめられたというのだろうか……これで三人目だな……俺の周囲で最近自殺したのは……そして自殺したのは、どれもこれもみんな二十代の人間だな……追いつめられる、追いつめられる。そして最後に頭の中に集ってくる蜘蛛の巣のようないろんな問題が、遂には自分で整理しきれなくなる……当然そうなる……整理などできるものではないのだからな……』

そして、彼は二ヶ月程前この大学生と会ったことを思い出す。この大学生が彼に「純粹哲理」の談義をしていく姿である。大学生は彼に言う。『ゾルレン的にみて、

意味をなさない思考も、結局は、あの大学生の生を生かしてはしなかった。が、及川隆一もそれとならん変るところはなかった。女の肌の中に生命を支えやかされてくる最後の抛りどころを捜し、過去の幻影におびやかされてつぎつぎといるのだから。あるのはただ八ぐにやりと肉のくずれ去る崩解感Vだけである。

学問や思想とは何なのか? なくてはならないものなのか? こんなことを言い出すと、曾野綾子さんあたりか「つまらないものがない社会ほど、つまらない社会はないのか?」とおこなれそうであるが、実のところどうなのか? 話が全然違う方向に走ってしまえばいいのだが、古代ギリシャの思想家、例えばソクラテス、プラトン、アリストテレスなどは、全て遊び人だったのである。つまり、労働は全て、謂ゆる奴隷にまかせておき、自分達は議論にあけくされていたのである。こういう遊び、人の思想をありがたく預く現代人とは、一体何なのか? あるいは、映画の広告文並みの論文しか書けない大学のお偉方の学問をありがたく預く我々学生とは一体何なのか?

とにかく、この「崩解感覚」を、象牙の塔に立てこもつたまま下界に顔を出さない人達に読んでもらいたい。そして、一度、自分の学問、研究とはほんとうに価値のあるものなのか、疑ってほしい。八ぐにやりと肉の

くずれ去る崩解感Vを味わった人だけに、自分の学問、研究を続けていってもらいたいから。

(法学部一回生・おだ さねあつ)



シルヴェット肖像

書評

辻邦生著 「廻廊にて」

(新潮文庫
二〇〇円)

小田実篤

生きるとは何か、そして、如何に生きるべきか、……この問題について深く考えさせられるのがこの「廻廊にて」(作者辻邦生・新潮文庫・二〇〇円)である。

今の若者は、非常にリスクを恐れ、自分を大切にすると言われる。この小説は、このような今の若者の生き方を撃つ。

例えば、女主人公マーシャに向かって、彼女の女友達アンドレは次のように言う。

「サーカスに集まる群衆が、その象徴だわ。あの人はちが生きてはいる。でもその生活は、隠につつまれた鈍い、平凡な、安全なものなのね。サーカスにきてても、ただ、そうした生活の鈍さから、ぬけだそうと考えるだけ

で、一瞬間、空中ぶらんこの戦慄を味わうと、もうその生の感覚には耐えられなくて、もとの隠のように鈍い自分たちの生活へ戻ってくる(亀が驚いて、くびを縮めるみたいに)……そしてほっとして、手をたたき、何か自分たちのほうが……安全のほうが……無事であることのほうが、勝利であるかのように思って、誇らしげに、喝采するわけね。」

そして、筆者は、こういう俗悪な幸福感、無事なことへの満足感を味わう人々をブルジョワと規定する。が、このブルジョアとは、謂ゆるブルジョアジー——プロレタリアートと区別する意味でのブルジョアではない。この場合のブルジョアとは、日常性に埋没してしまった主

体的な生き方、現実の中に投げ込まれながら、それを越えた目的を追求する生き方のできない人々のことなのである。この意味において、今の若者はブルジョアだと言える。

では、どうすればよいのか？（ある雑誌によると、ひと頃の学生ならば「何をなすべきか？」であったが今の学生は「何をなし得るのか？」だそうで、そういう点から言えば、「では、どうできるのか？」）

マーシャの女友達アンドレは、マーシャに向ってこう言う。

「ところが私たちは、前にいった、あの見えない力に見えない意志に、しばられ、強制され、盲目にされている。私たちは盲目にならされてしまっているのよ。ただこの一瞬の光を見た人たちが、見えない、この長城のような力にむかって、両手で叩きつづけるのね。その一人の力が、どんなに無力であったか、私たちは知っているわ。でも私が死んだら、私のかわりに誰かが、その誰かが死んだら、また誰かが、その見えない壁にむかって、叩きつづけるべきなのよ。」

この意志、つまり見えない壁にむかって叩きつづける意志が、人間の空間をつくらうとする意志なのだと筆者は続ける。つまり、コンクリートの罫よりも敵として存

在する力、この重い、しめつけてくる力に対して、両手で叩きつづける意志が、人間の空間を解放された空間を作り出すのだと言う。

ここで話が飛ぶ。飛ぶように見える。主人公マーシャは晩年次のように語る。

「ハ……。花々がその美しさを誰に捧げるわけでもないので、完全に開くように、人間だって、虚無のなかに、内からの純粋な欲望によって、咲きつづらるべきじゃないかって、考えられはしないかしら……。」

この場合、この言葉は「何のために生きているのか？」という問い——この問いは、常に自己、日常性に埋没した自己を、本来の自己に可能態としての自己へと立ち出でさせる——がすでに発せられた後に出たものである。

そういう見方をするならば、壁を両手で叩きつづける意志と、この言葉をはかさせる心理状態とは、同時元のものである。なぜなら、両者ともに、現存在としての人間が、被投的企投（現実の中に投げ込まれながら、それを越えて本来の可能性を実現すること）しているからである。

とにかくこの本は、現代の若者があまりにも日常性に埋没しすぎている、そういう状況から一人でも多くの若者が脱け出せるよう、読まれるべきなのである。

（法学部一回生・おだ さねあ）

お知らせ

書評編集委員会では、「書評」誌発行を媒介として文化運動を展開しようとしています。具体的活動は「書評」誌の編集発行と、講演会、映画会等の開催です。生協本部3F、書評編集委員会までおいでください。なお、編集委員には若干の活動費が支給されます。

投稿募集

最近読んだ本の整評、内容紹介、批判等や、研究成果の発表、論文、エッセイ、小説などの自己表現作業としてあるものをお寄せください。また、「書評」誌に対する意見、批判でも結構です。

投稿規定は次の通りです。

△原稿は出題として縦書きで、一行二五×二二行（五五〇字）を一枚とし計算します。枚数は自由です。なお必要な場合には原稿用紙をお渡しします。

△出稿には住所・氏名・学部・電話番号・連絡先を詳しく明記してください。

△原稿は一切返知しません。必要な場合はコピーをとってください。採用分には連絡します。

△採用分には、採料代として五〇〇〇円を進呈します。

△送り先

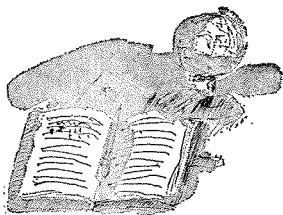
〒565 吹田市千里山東三丁目一〇一 関西大学

生活協同組合「書評」編集委員会

TEL 〇六一三八八一—二二一 内線 七七六



鏡の前の少女



まず、今回の書評52号が、生協新聞86号の「書評52号発行予定」の欄に書かれてあった内容と若干異なったことをおぼしめなければなりません。原稿入稿の遅れなどもあって、内容を少し変え、発行に及んだ次第です。今回から、山村嘉己先生の「研究余滴——ポードレール」、芝田稔先生の「日本中国ことばの来往」、田富先生の「差別落書問題をめぐって」の連載が開始されることになりました。諸氏の研究対象になれば幸いです。

*

最近長篇小説「同時代ゲーム」を出した大江健三郎は、「アイデンティティの危機」の中で小説を書きはじめた青年期から、やはり現在「アイデンティティの危機」を感じる中年期までをふり返った、興味深い一綴りの文章を、雑誌「世界」三月号に書いています。『同時代論の試み——作家自身によるモデル解説——』がそれである。その冒頭で大江健三郎は、青年とは「現在の世界に属する」というよりも、そのなかの未来にかざなる部分に、「多く属する」ものであり、「そのようにしてある青年」として、この世界は変革されてゆく存在として始めて自然な様相を示すはずだ。」とまで言っている。この一綴りの文章は、我々青年に対する手紙の形式をとっており、そのような意味からすれば、保守的だと言われる現

代の青年に対するアジ(煽動)だと取れないこともない。そして、彼は、つくり手の意識・世界感の反映から大きいのは芸術のモデルであり、そういうモデルであるからこそ、それは未経験な青年であっても同等の権利を主張し得るのだと言う。だから彼は、そういう芸術の一種としての小説の書き手たらんとしたのである。

ところで、この彼の常を逸したまでの「アイデンティティの危機」はどこからくるのであろうか？

彼は、アイデンティティが存在した、あるいは存在したかに見える時代を、自らの幼・少年時に求めているが、これはどうだろうか？

私事になるが、僕も、幼・少年期に垣間見た、謂ゆる全共同時代を非常に美化して思い出すくせがある。だがこれは、幼・少年時代の自由奔放な生活が、その時代のイメージと結びついて思い起されるからではあるまいか？大江健三郎の言うような「宏大な共生感」など、戦時中「彼の幼・少年期に存在しなかったのではあるまいか？彼をして「宏大な共生感」と言わしめるのは、少しばかり大人になり、物を知った彼が、その時代を「不信の時代」、孤独な人間がたがいな時代と見たからだろうか。が、いつの時代も「不信の時代」、孤独な人間がたがいな時代であったはずだ。とすれば、

彼はやはり、戦時中、あるいは敗戦後の解放された(かに見える)時代のイメージを歪形しているのだといえる。だがしかし、ここにこそ、つまり、幼・少年時代のイメージを美化し、イメージを歪形することによって、逆に歪形もたらした「宏大な共生感」を求めようとする姿勢にこそ、作家大江健三郎のすばらしさがあるのだと思う。

*

最近、わが国の新しい保守派をなすイデオログが、あいのやな情むべき「共同体」への呼びかけを行っている。彼らは、事あるごとに天皇をかたづけ出し、加冠の儀などと言って天皇制のお子様ランチを自指し、ソ連の脅威を訴え、愛国心をあおろうとしている。また、侵略の大義名分として徴兵制が出るようにまでなっている。然るに、このような事態に対処するための、それと闘うためのアイデンティティを今の青年は持ち得ていないように思う。大江健三郎は最後に我々青年に呼びかける。

「このような同時代を生きつつ、*米君よ、すでに中年の僕が青年たるきみに、基本的な言葉は、……きみ自身のこの世界のモデル、これをかかなくて人間としてこのモデルを、きみ自身として積極的なきざみ出すべく」とめよ。この課題に関しては、決して受身になるな、と

ということだけだ。」

今、大江健三郎は、少しオーバーかも知れないが、人間を救う方法として読まれるべきだと思う。心理学的に言っても、人間にとって集団欲とは、食欲、性欲と並んで人間の三大欲に入るものである。が、この集団欲、ひいては「宏大な共生感」が満たされる状況など今の社会にはないと言っているのではないか？ 何百万人が見たいようと、茶の間のテレビはついに視聴者同志を結びつけはしないのである。むしろ、支配者は、テレビによって、人々を個々分断バラバラにしようとしている。そして、今また支配者は、個々分断バラバラにされた人々に一方的な愛国キャンペーンをはろうとしている。今程、それと闘うためのアイデンティティーが要求される時はないのではなからうか？ そういう意味において、今大江健三郎が読まれるべきだと思う。(R)



泣く女